

---

# 予定犯罪

密 麻容

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

予定犯罪

### 【Nコード】

N8977C

### 【作者名】

密 麻容

### 【あらすじ】

一通の手紙から始まった出会い。超能力を持つ少年が求めたのは、事件の解決だった。真相が初めからわかっている事件で、少年が求めるものは。

## 1・手紙

何かが引き金となつて壊れてしまふ。

そんな事が多いから。

だから犯罪が無くならないんだ。

「これが真実なら…知らなくて良かったのかもしれない」

「それでも、真実は真実として受け止めなくてはいけないよ」

不知火唯しづめは目の前に座り、冷たい微笑を浮かべる少年を見て溜め息をついた。

色素の薄い灰色がかった細い髪。深く、何も映さない瞳は闇のような漆黒だった。

全体の雰囲気はやみれいが速水零はやみれいに似ているところが親類だということを表していた。

「一体何がしたいの？」

「ゲームだよ、ゲーム。全ては君に懸かっているんだ」

木製の椅子がギシツと軋む。背凭れに肘を置いて楽しそうに笑う少年。

事の始まりは一通の手紙だった。

梅雨前線が通過した次の日、澄んだ風と共に一通の手紙が運ばれてきた。

それを受け取ったのは零だった。それは偶然なのか必然なのかわからない。自然のようだったが、零はどこか意図的なモノを瞬時に感じた。気配で感じる感覚があった。

手に触れた瞬間、零は思わずその手紙を投げた。音もなく、ゆっくりと落ちる手紙から目が離せなかった。

手に残るのは、一秒でも長く持っていたくないような生理的拒否だった。

「零？」

零のその行動に驚いた源伶香みなもりかは、訝りながらも落ちた手紙を拾おうとした。

しゃがんで触れようとしたその時、

「触るな！」

零は叫んだ。その声に近くにいた唯、伶香は動けなくなった。

絶対的な命令。

今まで一度も聞いたことのない、零の声。威圧的で、しかし怒りはこもっていない警告の声。

麻生亮あそひろうはその中で唯一普通に動き、手紙を拾った。

「僕はいいいんだよね？」 「触るな」 だから『感応する能力』に影響するワケだね」

『感応する能力』、それは『未来を予知する能力』を持つ唯と、『人の心が読める能力』を持つ伶香、そして『過去を見る能力』を持つ零のことを指していた。零の警告では、この中で唯一『物を動かす能力』を持つ亮だけが、触ることができる。

無言で頷く零を視界に入れながら、亮は手紙に触った。

「その手紙・・・記憶がないんだ」

平然として封を開ける亮に近寄り、零は鋭い目で差出人の名前を見た。

やっぱり、と確信に変わる。

『速水彩』

「はやみ・・・あや？」

「『さい』。男だよ。で、従弟」

亮の間違いを正し、零は視線を逸らした。見覚えのある筆跡が零に残る彩の記憶を鮮明にした。

「従弟？ 従弟からの手紙がなんで危ないの？」

普段通りのペースに戻った空気の中、伶香は亮に近づき、触れないようにして手紙を覗き込んだ。

「『記憶がない』ってというのが引つかかるんだけど」

唯は零の方へ近寄り、瞳を真っ直ぐに見た。

零の瞳に浮かぶのは、優しさとそれ以外の何かが混じった複雑なモノだった。

「彩の能力は『反能力』。すべてを打ち消すんだ」

「どういう風に？」

「言葉使って。多分、今回ののは『手紙の過去』を『打ち消し』ただ」

今まで出会ったことのない能力に、零を除く三人は息を飲んだ。つまり今回、能力は役に立たない。

「なんで今頃……。彩は何を望んでいるんだ？」

零の呟きは唯だけに届いた。

開かれた手紙の中にはたった三行の文があった。

不知火唯は一人だけ仲間を連れて手紙から読み取れる場所へ。それ以外の者はマンションへ残ること。守らないと唯を殺す。

ゲームの始まりだよ？ 零

## 2・出会い

冷たいコンクリートに囲まれた密室。それは廃屋のビルの中だった。

どこからか隙間風が来て髪を揺らす。寒さを感じ、唯は無意識に手を擦り合わせた。

「ごめんなさい・・・呉さん<sup>くれ</sup>」

唯は『一人だけ仲間』に呉を選んだ。警部の肩書きを持つ、見た目は二十代半ばの呉は唯に薄い笑みを向けた。

能力は役に立たない。使えるのは頭脳のみということになる。呉は『仲間』の中で誰よりも信頼されていた。伶香でさえも懐いている。今、力になれるのは他の誰でもない、呉だけだった。

「気にしないで。ただ気になるのは・・・」

「僕の情報が少なすぎること？」

二人が顔を見合わせた瞬間、本当に一瞬で少年は現れた。

「ハジメマシテ唯、呉さん」

真ん中に置かれた木製の椅子に少年は座っていた。

黒一色に統一された体。肌だけが白く、目を引いた。少年は闇を含んだ瞳を細め、唯を睨んだ。

「流石だね。呉さんを選んで正解だよ。ゲームには有利だ」

「一体何がしたいの？」

「ゲームだよ、ゲーム。全ては君に懸かっているんだ」

「さあ、ゲームの内容を聞かせてもらえる？」

「ふーん・・・乗り気なんだ？ さては零だね。彼が君に言ったんだね？ さしずめ『彩は君に何かを望んでいる』ってところかな」

唯は微動だにせず、彩の言葉を聞いていた。まったくその通り、零は「その言葉」を言った。そしてそう言われるとも言っていた。何処まで二人は似ているのだろう、と疑問に思う。

呉は無言で二人のやり取りを聞いていた。その呉に、彩は一瞬だ

け視線を移した。その行動に意味はなかったはずだったのだが、呉の頭の中には残った。

まるで誰かと重なる。すぐに思い立った人物は彩の血縁で、彩は出会った頃の彼に似ていたのだった。

椅子から立ち上がった彩は腕を組んで、二人に対峙した。

唯は隣に呉がいるため少し緊張は解れ、表情を緩めた。自然と口調が柔らかくなっていた。

「・・・本当に何かを私に望んでいるの？」

「さあね。僕は伶香のようなテレパスじゃない。答えを知るのはゲーム終了の時さ」

### 3・ゲーム

「ルールは簡単。呉さんが謎を解くこと。OK?」

軽い調子で淡々と言う彩に、呉は無言で頷いた。

彩はそれを確認すると、腕を解いて右手を上げた。

パチンツと指が鳴る。

「これは実際にあった事件だよ。さあゲームの始まりだ」

「三ヶ月前のあの日の出来事は今『見えない』」

一瞬にして空間が変わった。

コンクリートの壁は、ある研究室へと変わった。

「藍<sup>あい</sup>！」

うつ伏せに倒れている女性、藍に駆け寄り抱き起こす青年の顔は蒼い。室内には蜂が何匹か飛んでいた。そして、先程まで藍が座って眠っていたパイプ椅子が倒れていた。

青年は蜂に注意を向けず、ただ藍だけに集中し、腕を取り脈を確かめた。何の反応も示さない腕の次に首へと手を当てる。脈がないことを信じたくないというように、蜂に刺される感触さえ、気にしていなかった。

「堂島<sup>どうじま</sup>くん・・・」

「駄目だ・・・死んでる」

堂島は藍を一度強く抱き締め、ゆっくりと横たえた。淡い、黒の髪が広がる。

もう動かない、体。

「致死量の毒を持った蜂はいなかったはずだ。・・・まさか」

藍の白衣を捲った堂島は予想が当たっていたことに驚愕した。そして同時に怒りが込み上がってきた。



「この死骸・・・」

一点を見つめたまま離れない視線。

蜂に刺された痛みはもう感じてはいなかった。

「堂島くん！ あなた刺されているじゃない！ 早く手当てしないと」

高橋の声が虚しく響く。堂島の耳には何の音も入っていないかった。

断片的に現れたこの光景に、呉は何かの意味を感じとった。

彩の意図するトコロは。

#### 4・事件

「これがその事件だよ。藍は死んだ。蜂に刺されてね」

藍、堂島、その他の登場人物はまだドラマのように物語を作っていた。

彩達の姿は見えていない。なぜなら、この世界は三ヶ月前の事件の日だからだった。

「部屋は密室。密室と言っても鍵は開いていた。蜂は実験用に育てていたのが何故か飛び回っていた」

彩は倒れている藍と警官、その他の関係人物を目で追いながら呟いた。無意識的に視線は藍へと向いている。

その目には今までなかった憂いがあったのを、唯は見逃さなかった。

「藍さんって・・・」

「皆さんはどういう関係なのですか？」

唯の問い掛けは警察官の声にかき消された。

一方的に始まっているドラマ。呉はその劇をじっと見つめたまま動かない。

ずっと堂島の隣にいた女性が代表して答えた。

「薬科大の研究仲間です。藍さんと堂島くんがAチームで私、高橋と松田くんと長谷川さんがBチームで研究していました。研究内容は『虫の毒』について。今は『蜂』がテーマです」

「人物関係は知らないよ。この事件で解くのは謎だからね。まあわかってると思うけど、藍と堂島は付き合っていたんだ」

丁度良いタイミングで彩は話す。今進んでいるのは人物関係の話だった。

「藍の体には多数の蜂に刺された痕が残っていた。白衣に何匹か蜂の死骸が残っていて、室内の蜂は一匹ずつ多種いたんだ」

「容器が開いていて、密室だったんですね」

警官は苦虫を潰したような顔になった。彩はそれに対して舌打ちをした。表情は本当に悔しそうで、唯はある疑問が確信に変わっていくのを感じた。

「あれ？ 長谷川さんは部屋に入っていませんね」

「ええ・・・堂島くんの声がいつもとは違っていたので。あと松田くんがドアの前に立っていて入れなかったんです。・・・見せないようにしてくれたんです」

長谷川は目を逸らした。その瞬間に呉と目が合った。いや、視線が重なっただけだった。これは映画のようなモノだ。

呉は劇から目を逸らし、彩の方へ向いた。

彩は微笑し、指を弾いた。

「結果、偶然密室で、偶然刺されたということになったんだよ。警察は事故としてこの事件を終わらせたんだ」

パチンツ、と軽い音が響いた。

## 5・事件2

研究室の中には高橋、長谷川、松田、そして今より表情が豊かな彩がいた。時間が変わっている。

「あははっ そうなんですか？」

「そうなのよー。もう山なんて行きたくないわね」

楽しそうに笑っている彩の隣には高橋が座っていた。高橋は困ったような表情を浮かべて彩を見ていた。その光景は姉弟のように見える。

真ん中には円形のテーブルがあった。主に談話の為に利用されている空間だとわかる。高橋の隣には長谷川、松田と並んでいた。

「僕はよく研究室に行っていたんだ。理由はどうでもいいよね？皆と仲良かったよ。・・・僕がそう思っているだけかもしれないけど」

彩はゆっくりと、座っている過去の彩の方へと歩いて行った。

「私、ハチ駄目なのに高橋、無理言っただもの」

「あーアレね。でも松田くんもキノコ、駄目だったよね？」

高橋の問いに松田は苦笑した。右手をぶらぶら振って彩に笑った。「前に毒キノコを食べてね・・・それ以来駄目なんだ。笑い系だったんだけど」

「大変だったんですね・・・僕は蛇に噛まれたことならありますよ」

「えー君こそ大変じゃない。松田くんなんて目じゃないよー」

長谷川は松田の背中をバンバン叩いた。咽る松田。

高橋と彩は顔を見合わせ、笑った。

確かに彩の言った通り、仲は良かったようだった。

「何やっているんだ？ 少しくらい手伝ってくれてもいいだろう・・・。彩、藍はもうすぐ来るから」

両手に機材を持ち、器用にドアを開けて堂島が現れた。それと同時に、現実の彩は座っている彩に後ろから抱きついた。

「堂島さん・・・あなたのせいじゃないよ」

「ここからはヒントだよ。僕が持っている情報を平等にあげる」

彩は登場人物になりきり、目の前に現れた堂島に声をかけた。現実の彩と過去の彩が重なる。

「堂島さん、この蜂、研究室にいますか？」

彩はいつの間にか一枚の写真を手にしていた。そして堂島の眼前へと移動させた。

堂島はじっくり見た後、少し考えてから彩の方へと視線を移した。「いたけど、今はいない。遊びに来ていた他の研究員が刺されたかな」

「そうですか・・・」

少し安堵の表情を見せた彩に、堂島は苦笑した。

「大丈夫。ちゃんと知っているから」

今ここにいるのは偽者の堂島だとわかっているが、彩は顔が緩むのを抑えられなかった。その彩の表情は唯には泣きそうで、何かを我慢しているように見えた。涙以外の何かを我慢している。

唯の思考を遮るように、再びコンクリートの壁が現れた。

## 6・真実

「アナフィラキシー・ショック」

「！」

ぽつりと呟いた呉の言葉に、彩は目を見開いた。

「藍さんは一度、蜂に刺されたことはあった？」

「小さい頃に……」

彩の肯定の言葉に呉は一度頷き、言葉を続けた。

「一度蜂に刺されると、人間の体にはその蜂に対する抗体が出来るんだ。抗体を持つ人間が再びその蜂に刺されるとアレルギー反応を起こす。この反応の激しい状態をアナフィラキシー・ショックというんだ。場合によっては死に至る、と聞いていたけど」

呉はゆつくりと、一言ずつはつきりと言う。

「犯人は……多分だけどBチーム全員じゃないかな。長谷川さんは部屋に入らなかった、というのがひっかかるね。彼女は『ハチが駄目』だった。『複数の蜂』。多分彼女が一度刺された蜂も入っていたんだろう。だから松田さんは彼女をドアの前で止めた。そういう役なんだろうね。あと堂島さんが呟いた『この死骸』。アレが『いないはず』のアナフィラキシー・ショックを起こした蜂だったんだろう」

松田の言動。そして部屋に入らなかった長谷川。複数の、蜂。

「……何故助けてくれなかった！」

彩は椅子を蹴った。木製の椅子は簡単に壊れた。

「何故姉さんを助けてくれなかった！ 警察は姉さんの命を価値のないものにしたんだ！」

「やっぱり……藍さんは『姉』だったのね」

今にも呉に掴み掛かりそうになっている彩の腕を唯は掴んだ。

彩は驚いて唯を見た。

「やっぱり……」

「『藍』って呼ぶのに慣れていなかったから。あと似てるしね、色素」

「ははっ・・・ゲームは君達の勝ちだ。僕は負けた」

自嘲気味に笑う彩に、唯は掴んだ手に力を込めた。

今、離すと消えてしまう、そう予感した。予知ではなく、予感だった。この従弟は彼に似すぎている、と唯は感じた。いつも唯達の近くにいた彼に。突然消えてしまいそんな空気を纏っているのは血縁だから、と理由だけではないような気がした。根本的に、性質的に零に似ている。

「偶然部屋に蜂がいて、偶然容器が開いていて、偶然白衣に止まっ  
ていて、偶然刺された？　それが『偶然』じゃないってことくらい  
わかるだろ！？」

「警察だつてこの結論には到達したはずだ。それなのに何故？」

呉は最後まで引つかかっていた疑問を口にした。

そう、すぐにわかったはずだった。事故なんかではないのは明らかだ。偶然は必然過ぎた。

彩は下を向いた。自然と声が沈む。

「・・・あの人たちの親は政治家、弁護士、医者なんだ。『必然』  
な『偶然』は『事故』なんだよ」

唯は少し、ほんの少し彩の手が震えているのに気付いた。何かを隠している。

本当に知って欲しい何かを。

「何故そんなに罪深く感じているの？」

はっ、と顔を上げた彩の視線の先にいたのは真っ直ぐ見つめる唯で。その瞳に映っているのは慈愛のようにも同情のようにも見えた。確信出来たのは思いやりだけで。

「僕があの人たちに蜂の種類を教えたから・・・僕が姉さんを殺したんだ！」

「違うわ！　罪を背負うのはあなたじゃない。あなたが用意したのは火薬だけ。それを調合して火をつけたのはあの人たちなのだから」

原因は彩。しかし過程は彩ではなく高橋達。原因を作った罪を知って欲しかったのは事実だったが、認め、それでも悪くないと言ってくれるとは予想していなかった。

彩の瞳が揺れた。

「僕は零が羨ましかったただけなのかもしれない。仲間がいて、幸せに暮らしている零が。・・・勝ちたかった・・・そうすれば」

「彩が私に望んでいるのは『未来』だわ！」

はつきりと言い切った唯に彩は口を噤んだ。

腕から伝わる温もりが思いの他心地良かったのと、瞳に少しも怒りが籠っていないからだった。

「すごいよね・・・唯も呉さんも。早く出会いたかったよ・・・」

「待って！」

「僕は今、ここにいる」

彩はここに『いる』ことを打ち消した。

一瞬にして彩はいなくなった。残っているのは壊れた椅子だけだった。

「これが真実なら・・・知らなくてよかったのかも知れない」

「それでも真実は真実として受け止めなくてはいけないよ」

真実は残酷だった。不確定なままだったら彩は少しは救われたのかもしれない、と思う。しかし知ってもらったことを望んだのは彩だったのも事実で。どうしようもないジレンマだ、と唯は目を伏せた。今まで彩の腕を掴んでいた手を見た。

確かに感じた体温。外見からは感じられない人間らしさを感じた。

「あの日、あの時居たらなんて考えるだけ無駄だけど・・・考えてしまいますよね」

「そうだね。でも少なくとも彼は救われたんじゃないのかな。彼はまたきつと現れるよ」

呉は唯の肩にそつと手を置いた。呉は逆のことを言う。知ったから救われた、と。結局は彩にしかわからないことなんだ、と納得し



た。

呉の優しさに微笑し、唯は振り返った。

「呉さんの予言は当たりますもんね」

## 7・水野医院

「・・・彩？」

水野医院を訪れた唯、零、呉の前にいたのは紛れもなく彩だった。水野の前の患者用の椅子に座り、二人は仲良く話している。それはどう見ても初めて会った二人、という光景ではなかった。何度か会ったことがある親しさが表れていた。

ドアが開いたのに気付いた彩は視線だけを移し、軽く言った。

「久しぶり。元気だった？」

呆然として言葉の出ない唯、零に対し、呉はやっぱり、と呟いた。何処か確信していた節がある呉の呟きに唯は、前に聞いたセリフを思い出して小さく口に出していた。

『彼はまたきつと現れる』

零もそれを聞き逃すはずもなく、彩から視線を外し、呉を見た。

「やっぱりって・・・」きつと現れる』ということは」

「水野がね、患者に面白い人がいるって言ってたんだよ。死体の写真を見せて、死因は何かって訊いてきたって。結局その時は何も教えてくれなかったけど」

「それで『また現れる』ね。やっぱり呉さんの予言は当たるわ・・・」

唯は苦笑して呉を見た。呉は優しく微笑み、目で零を見るように合図した。

「零、久しぶり・・・。もっとも君は会いたくなかっただろうけど」「まさか」

否定の言葉を発したきり、零は黙った。

彩はどう言葉を繋げていいものか迷っていた。零に対して言いたいことは山ほどあった。三年前から今まで溜めていた思いがある。しかし全てを言うわけにもいかないし、何から話せばいいかわからない。

無言のまま時は過ぎる。水野はというと、この状況を楽しんでいた。水野はいつもこういうとき傍観者を決め込む。下手に口を挟むのは良策とは言えない、という理由より、ただ好奇心が勝ってるだけだった。

呉がぽんつと背中を押したので、唯は足を一步踏み出し、二人の間に立った。

「零はね、手紙の差出人がわかった時、少し笑ったのよ。苦笑っぽくね」

例えるなら懐かしい友人から手紙をもらったような、と付け加えた。

零がそんな反応をしていたとは思わなかったため、彩は心底驚いた。表情にはつきりと表れる。

「嘘・・・」

「なんで嘘？」

一步、零は近付いた。彩は椅子に座っている為、逃げる事が出来ない。少し体を引いた。

「嫌われているかと思ったから・・・『なんで今頃』って・・・」

「・・・聞いてたワケ。何もない時に手紙が来たら不思議に思うけど？ 手紙が来て、正直嬉しかった。三年前、嫌われていたのは僕の方だったはずだから・・・嫌いじゃない」

最後の言葉に安心して気が抜けた彩は、前へと屈み込んだ。

零は彩が聞いていたことに対し、少しも驚かなかった。彩の能力を考えれば可能だった。ただ、あの時感じた意図的なモノや気配は彩だったのか、と納得した。三年間会っていないなかったので正体が掴めなかった。三年前ならすぐにわかっただろう。

彩は暫くしてゆっくりと顔を上げた。

「そっか・・・」

気を緩めた笑顔に唯、呉、水野は驚いた。

こんな顔も出来るんだ、と。

零は以前に見た顔と変わっていないことに安心し、ほんの少し表

情が柔らかくなった。

「久しぶり。元気にしてた？」

零特有の口だけに笑みを浮かべる笑顔で手を伸ばした。

「まあね」

何の迷いもなく手を受け取った彩は立ち上がった。

それからあっさりと手を離し、背中に回して指を組んだ。

「僕、水野さんのトコロでお世話になることになったんだ。『帰る場所はない』って言ったら、『ここに住めばいい』って言うてくれ。零に嫌われていてもいいから、近くに住みたかった。零と唯と呉さんのいるこの場所が良かった。水野さんもイイ人だし」

につこりと笑って水野の顔を覗き込んだ。水野は笑っている。二人はまるで兄弟のように見えた。

## 8 予定

「呉さん！ 水野さん！ 決まりましたよ！」

開いていたドアから勢いよく入ってきた柴田耕平しばたこうへいは思い切り強く呉にぶつかった。しかし、予想していた衝撃がなかった。

柴田が来るのを予知していた唯はすぐに呉に伝えていた為、呉は柴田を受け止めていた。柴田は顔を上げ、照れくさそうに笑った。

「耕？」

「呉さん、すいませんでした。唯ちゃん、ありがとう。えっと・・・  
そう！ 犯人捕まりましたよ！」

その言葉に彩は思わず立ち上がった。呉と水野は意味ありげに笑い、柴田は明るく笑った。

「彩くん、水野さんに渡した写真、覚えてる？ 君が過去に行つて撮つて来た藍さんの写真。アレに証拠が写っていたんだよ」

後はまかせました、と水野にバトンタッチをした柴田は、目の前に立つ呉に握り締めていた資料を渡した。その厚さは柴田の努力の証だった。

「死因の刺し傷が明らかに注射のモノだったからね。僕が調べていたらすぐに捕まったんだろうけど・・・上の息がかかったヤツらが担当した事件だから。ちゃんと鑑識の写真にも写っていたから証拠になるよ」

「その証拠で他殺と決定したので、すぐに自白しましたよ。杜撰過ぎる犯行でしたから」

ね？と資料に目を通していた呉に同意を求めた。

軽く内容を把握した呉は柴田に頷き返し、彩の方へと向き直った。強張った表情の彩は呉からの視線を一度逸らしたが、すぐに受け止めた。

「これで終わったんだ」

「・・・いいんですか？ この事件は政界のあの人たちの親の力が

かかって未解決だったんですよ？　あなたたちに迷惑をかけるために『ゲーム』をしたんじゃない」

犯人が捕まったのは嬉しい。しかしそのために呉達に迷惑がかかるならリスクは大き過ぎた。唯だって初めから殺すつもりなどなかった。

彩はただ、零や唯たちに真相を知ってもらいたかったただだった。「迷惑はかからないよ。僕と呉を切るリスクの方が大きいからね。呉に至ってはあの人達がそれを許さないと思うし」

水野の意味深な発言に呉に、隣の柴田は溜め息を吐き、呉は曖昧に笑った。まだ唯達が知らない謎が呉達にはあった。

零は何かを悟ったように、呉に対して笑みを浮かべた。勘の良すぎる子だ、と呉は微妙に苦笑し、黙っているようにと目で合図した。零は頷き、放心している彩に近づいた。

「彩、藍さんはこのことがわかっていたんだと思う。前日に僕の所へ来て言っただ。『彩のことを頼む』って」

「姉さんに力は・・・」

「なかったよ。でも人間の持つている第六感でわかっていたんだ。虫の知らせとかあるしね。藍さんは最後まで彩のことを心配していたんだ」

静寂が辺りを包み込んだ。様々な思いが渦を巻く。

姉を思う彩の気持ち。弟を思う藍の気持ち。

従弟を救いたかった零。彩を救った呉と唯。

全て聞いたことで、実際見て体験していないが資料を集め、彩のために動いた柴田。証拠を指摘した水野。

そう全てこれは。

「これは予定犯罪だったんだ・・・。藍は全て知っていた」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8977c/>

---

予定犯罪

2010年10月8日15時47分発行